

問題・解答
用紙番号

7

の解答用紙に解答しなさい。

国

語

〈受験学部・学科〉

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、
看護学部、農学部【文系科目型】

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(五五点)

公共哲学は公共性とは何かを考える学問です。公共性という言葉は、多義的でいろいろな要素を含んでいるのですが、さしあたり、「公共性というのは公共の利益ということである」と理解してください。その場合、ポイントは二つあります。ひとつは、公共性というのは「一人でやるのではなく、みんなで協力する」ということを意味しているということです。もうひとつは、公共性というのは、無秩序ではなく、秩序を求めるという志向性を含んでいるということです。この協力と秩序の話から始めましょう。

まず、協力^Aについてですが、公共性は一人で実現することはできません。なんらかの形でお互い協力するというのが必要です。その場合、お互い相手のことを考えて、自発的に協力するのであれば、それはみんなのために協力する、つまり利他主義的な協力ということになります。しかし、現在のわれわれの社会を考えた場合、大体において自分だけの利益を考える、つまり利己主義的な人間が集まって生活しています。その場合、自分の利益になることであればともかく、人のために何か協力するということにはなりにくい。まして自分の不利益になることについて協力を求められなくても、それに応じるということにはならないでしょう。しかし、これではお互い協力するということとは実現しないし、人それぞれバラバラに行動するのでは、公共性を実現することも不可能になります。

そこで、非自発的な協力あるいは強制的な協力、つまり協力しない場合には、何らかの制裁を加えることにして、協力を調達するという考え方ができます。この非自発的な協力の^①テンケイは、われわれのような社会では、法律に基づく制裁によって協力を促すということです。制裁といって

もいろいろあり、刑罰というもつともドラスチックなものや、課税という比較的マイルドなもの、幅が広い。刑罰という強い手段に訴えても協力を引き出さなければならない場合というのは、非協力によって社会的害悪が生じることが明白な場合です。

例えば、社会の基本ルールにみんなが協力して従っているのに、一人だけがその基本ルールを守らないという場合には、その非協力的な行為に対して、刑罰という制裁を加えてルールを守らせるようにする。排気ガスについての環境基準値を、みんなが協力して守っているのに、みんな守っているなら一人ぐらいいいだろうと考えて、環境基準値をはるかに越える排気ガスを放出しながら、車を運転するドライバーに対して、一定の処罰を加える。これに対して、この環境基準値を守ろうといろいろ努力しているのだけれども、それがなかなか難しい。基準値を達成しようとする経済的負担が大変なので、ついつい基準値をオーバーする車を走らせるという場合には、刑罰よりも税という、よりマイルドな制裁を課することによって、Iに協力を引き出す。あるいは、政府や地方自治体と地域の自治会などが、交通安全週間などの期間を設定して、いわば官と民が一体となって、人々に交通ルールを守るように促す場合などは、課税よりもさらにマイルドな仕方の人々の協力を引き出そうとしている。これは、人々が自発的に協力するという面もあるでしょうが、お上が音頭をとって周りを盛り上げて、みんながその気になっているので自分だけその輪に加わらないのはバツが悪いと思って、いわば周りから圧力を受けて協力しているので、社会的な制裁を使って協力を求めるという意味で、自発的な協力というよりは、やはり非自発的な協力といえます。

こうした広い意味での非自発的な協力に対して、自発的な協力というのは、人々の利他心に訴えて協力を引き出すというものです。これは先ほど述べたように、われわれの社会が利他心よりも利己心を強調しがちであることを考えると、限られたものであるといわざるを得ません。ただ、人々は、自分の身近な存在に対しては、いわば自然に利他心や思いやりをハッキ^②するものであること、また利他心や思いやりは、人々が外の世界と広範に関わることによって、広がるものであることなどを考えると、たとえばささやかなものであっても、自発的な協力を継続的に行い、それを少しずつ広げていくことによって、利他心や思いやりが少しずつ広がり、それがまた、より広範な自発的協力を引き出すということは、十分考えられるでしょう。

これらの非自発的な協力と自発的な協力の間に、競争による意図せざる結果としての協力というものがあると考えられます。競争が協力に含まれるかどうかについては、意見の対立があるでしょう。競争がしばしば協力を阻害することは事実です。競争は自分の利益を実現するために相手と競うことであり、自分と相手とは対立関係にある。競うといっても争っているものであり、主観的に見る限り互いに協力しているとはいえません。

しかし他方で、十八世紀のデビッド・ヒュームやアダム・スミスが考えたように、競争という枠組の中で競うことによって、人々は、個々人の主観とは別に、いわば意図せざる結果として、公共

の利益Ⅱ社会の富の増大を達成するのです。アダム・スミスは『国富論』（一七七六年）の中で、これを「神のみえざる手 invisible hand」と表現しています。つまり人々は、競うことによって、神のみえざる手に導かれて、公共の利益を達成するというのです。これを、われわれの身近な例に照らして考えれば、よきライバルによって名勝負が生まれ、双方の技量の上達を生むということでしょう。

現在では、自由な経済競争は市場経済^Bと呼ばれています。そこでは、国が経済を管理しているのではなく、様々な個人や企業が、自己の利益を実現するために、競い合っています。これらの個人や企業は、利己的な動機に基づいて行動しているけれども、そうした行動の集積によって、結果的に、技術革新とか社会的富の増大という公共の利益が実現されます。

もちろん、市場経済では競争が行われているのであり、その結果として勝者と敗者が生まれます。これは貧富の差が生み出されているということです。この側面だけに着目すれば、市場経済は公共の利益に適う制度とはいえないでしょう。実際、もし競争が勝者と敗者を生み出し、しかも勝者は常に勝ち続け、敗者は常に負け続けるならば、市場経済は弱肉強食の場と化し、富裕層と貧民層の階層の固定化と格差の拡大が進んで、秩序が不安定となり、市場経済の公共性は失われるでしょう。

だが現実の市場経済では、少なくともそれが健全な姿で機能している限り、今日の勝者が明日の敗者となり、昨日までの敗者が明日の勝者となるというように、勝ったり負けたりという事態が生じています。勝者は、自分の勝ち方を相手にさらすことによって、いわばハンデを負う。敗者は、勝者の勝ち方を模倣し、それに新しい技術を加えることによって、明日の勝者となる。さらに、こうした勝ち方や新しい技術が、社会に共有され、社会の進歩を促します。さらに、こうした「勝ったり負けたり」という事態が習慣化して、それについての認識が人々に共有されてくると、人々の間に自由な競争への信頼が生まれ、それは秩序の安定化につながります。これが市場経済の公共性ということなのです。

実際、日本社会において、いわゆる高度成長の時代には、確かに官僚主導の経済運営という側面があったとはいえ、勝ったり負けたりという事態もそれなりに存在したし、自由な競争への信頼も、部分的にせよ生じていたと思います。もともと、同時に心に留めておかなければならないのは、いわゆる冷戦以後の世界におけるグローバル・エコノミーの展開が、南北の間の深刻なあるいは絶望的な経済格差を生み出しつつある、ということです。そこには勝ったり負けたりという事態が生じる余地はますます狭まりつつあり、それによって、自由な競争への信頼の喪失と弱肉強食としての市場経済という観念が、勢いを増しつつあります。

そしてこれに対して、主に平等主義的な立場からの批判が生じています。それによれば、意図せざる結果としての協力という観念に含まれる、「競争すれば協力していることになる」という考え方は、利己主義を助長し、協力の観念に本来含まれている利他主義および平等主義を弱めることに

なり、ヘイガイが多い③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿です。ただし、社会主義経済が崩壊して、国家（共産党）の主導の下での、統制経済による平等化の図式が信頼を失った現在では、平等主義のインパクトが弱まっていることは否定できません。貧富の差の是正や平等の実現のために、公正や福祉などの観念が唱えられますが、いずれも、市場経済をⅡにせざるをえないのです。

以上のような考察に立つてここでは、広義の協力という考え方を採用し、意図せざる結果としての協力という観念を含めつつ、利他主義的な協力や平等主義のヨウセイ④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿と合わせて、公共性問題を考えていくことにします。

ここで、ここまでの議論をまとめておきましょう、まず、協力には、自発的な協力と非自発的な協力があります。自発的な協力というのは、主として利他的な動機に基づくものです。これに対して、非自発的な協力というのは、法的なあるいは社会的な制裁という手段によって可能となるものです。さらに、協力には、意図的な協力と意図せざる結果としての協力があります。この後者の、意図せざる結果としての協力というのは、Xによって可能となるものです。人々は利己心から、自分の利益を実現しようとして行動するのですが、それを越えて、Yのです。

公共性を考えるときに、協力と並ぶもう一つのポイントは、秩序①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ということです。お互いに協力するということは、確かに秩序と結びつく。しかし、秩序の形成①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿というのは、それだけではありません。まず、一回だけの協力、あるいは断続的な協力では、秩序の形成①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿というには、十分ではありません。協力が継続的に行われ、さらに、社会慣習として定着している必要があります。これはなかなか難しい。

社会の中で自発的な協力が継続して得られない場合、権力（権威）によって法秩序を形成し、維持することは可能です。むしろ、いわゆる秩序問題は、これまで、主として権力（権威）の問題であると考えられてきたように思います。そして、この場合には、公共性の担い手は国家ということになります。国家が、公共的な秩序を維持し形成するための主体としてまず考えられている。議会が法律を作ってそれを施行する。行政が、法律に基づき、細則を定めてそれを実施する。あるいは、司法が、法律に基づいて、裁判を行い判決を下す。こうした国家の公権力の行使によって、公共的な秩序が維持され形成される。これは、いわば上からの公共性、上からの秩序形成ということですが、最近における公共的な秩序形成の議論として、下からの公共性、下からの秩序形成ということがいわれます。この下からの秩序形成の可能性が、どの程度のものなのかということについては、論者によって意見が分かれています。国家主義の立場によれば、公共的な秩序の担い手は国家であり、かつ国家によって独占されるべきである。下からの秩序形成の動きというのは、しばしば国家による秩序形成を批判するものであり、いわば国家の足を引っ張るものであるから、マイナス要因であり、基本的に否定されるべきものと考えられる。したがってそれは、国家による公共的な

秩序形成の動きを支持する場合にのみ、副次的なものとして評価されうる。この考え方は、いわゆる公（おおやけ）と私（わたくし）の二分法に立つものです。日本でもお上という考え方は、この二分法に立つものであり、私（わたくし）による下からの公共性の動きは、公共的な秩序の維持にとって、危険なものとして見なされる場合が多いのです。

これに対して、ここでの立場は、下からの公共性、下からの秩序形成をできるだけ認めようという考え方に立っています。したがって、ここでは、公共的な秩序形成に関して、公（おおやけ）と私（わたくし）の二分法はとりません。それに代えて、「公」―「公共」―「私」の三分法を採用します。この三分法については、ここではただ、下からの公共性について、三分法のうちの「公共」を中心として考えること、また「公共」によって、民主主義の実践だけでなく市場経済の実践を含む、広義の市民社会を考えていることだけは指摘しておきましょう。

例えば、一九九五年に阪神淡路大震災が起きたときに、様々なボランティア活動が行われて、被災者の人々の生活を支えたということがありました。これは、ここである市民社会からの、下からの公共性、下からの秩序形成と考えることができます。しかし厳密に言えば、こうしたボランティア活動が下からの公共性といえるためには、それが、一回限りのものではなく、継続的な活動として定着する必要がある。一過性の流行のようなものではなく、様々な活動が有機的に結びついて、^⑤コウジヨウ的な運動として、社会の中で一定の役割を果たし続け、社会慣習として定着する必要があります。実際、阪神淡路大震災におけるボランティア活動の高まりがひとつのきっかけとなって、一九九八年にいわゆるNPO法（特定非営利活動促進法）が成立施行されましたが、それだけでは市民社会からの下からの公共性があるということではできません。NPO法は、法律である以上、上に述べた三分法の「公」の部分であって、「公共」の形成に必ず結びつくというものではない。むしろ、この法律が刺激となって、「公共」の領域におけるNPO活動が活発化することが期待されているのです。この意味では、日本社会における市民社会の形成、下からの公共性形成というのは、今後の課題として残されています。

また、政党の活動、例えば自民党や民主党などの政党の活動が市民社会の形成、下からの公共性形成とどのように結びつくのかという問題もあります。現在の政党は、選挙で国民の投票によって候補者を当選させ、議会に代表を送り込んで、「公」による上からの秩序形成を図ることを主たる目的としています。その限りでは、政党の活動が、ここである市民社会の形成に結びついているとはいえません。むしろ政党は、これまで基本的に上昇志向なのであって、法律の制定や国家予算の配分などにおいて一定の役割を果たすことに主たる関心がありました。

しかし、例えば、日本社会がこれから高齢化社会に向かっていくときの介護という問題を考えたときに、法律の充実や福祉予算の充実を一方で、そうした制度や予算をしっかりと受け止めることができる社会の受け皿の形成、法律や福祉予算が有効に活用されるための、社会のネットワーク

の形成が重要となります。制度だけ作っても、それが

Ⅲ

したり、予算をつぎ込んでも、そ

れが砂に水がしみこむように消えてなくなってしまうというのでは問題です。こうしたことのないように、「公」と「私」の間に、両者を媒介する「公共」の領域を形成して、有機的な連関を図る。こうした社会のネットワークの形成に、現在の政党がどこまで関心を示しているかは、疑問であるといわざるを得ませんが、今後の政党の役割として、「公」の形成と並んで、「公共」の形成に一定の役割を果たすこと、あるいは、「公共」が、民間のNPO活動の集積といった別の形で、形成されつつあるときには、少なくとも「公」と「公共」の橋渡しをするという役割が、政党に求められるようになるでしょう。いずれにせよ、公共性が秩序の形成と結びついているというとき、それは必ずしも、「公」という秩序の形成に限られません。「公」―「公共」―「私」の三分法という観点からは、「公共」というレベルでの秩序の形成もまた、あるいはむしろ「公」という秩序の形成以上に、現代社会における公共性の問題を考える上で重要なのです。

(桂木隆夫『公共哲学とはなんだろう』一部改変)

問一 波線部①～⑤と同じ漢字を含むものを、次のア～エのうちからそれぞれ一つ選びなさい。

① テンケイ

② ハッキ

ア 時代のテンカン期を迎える

ア キチに富んだ会話をする

イ 事態が大きくシンテンする

イ リーダーとして現場をシキする

ウ 百科ジテンで宇宙について調べる

ウ 仕事がキドウに乗る

エ 山間地に住居がテンザイする

エ 試合に向けてフンキする

③ ヘイガイ

④ ヨウセイ

ア 新しいシヘイを発行する

ア セイガン書を提出する

イ ヘイイな日本語で話す

イ セイレン潔白な人柄である

ウ ヘイソクした空気を打開する

ウ 厳しいセイヤクを課す

エ 小学校の教員がヒヘイしている

エ セイニク店を営む

⑤ コウジョウ

ア ジョウジョウ酌量の余地あり

イ ジョウシキにとらわれない

ウ 不動産をジョウトする

エ ジョウリュウ酒を製造する

問二 空欄 I Ⅲ に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選び

なさい。

- | | | | | | |
|---|-------|----|------|-----|-------|
| I | ア 例外的 | II | ア 前提 | III | ア 簡素化 |
| イ | 示唆的 | イ | 参考 | イ | 複雑化 |
| ウ | 間接的 | ウ | 優位 | ウ | 形骸化 |
| エ | 妥協的 | エ | 問題 | エ | 分権化 |

問三 空欄 X ・ Y に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | |
|---|----------------|---|----------------|
| X | ア 周りからの圧力という制裁 | Y | ア 相互の利益を達成する |
| イ | 利他主義的な協力 | イ | 貧富の差を是正する |
| ウ | 技術革新や社会的富の増大 | ウ | 秩序の安定化につながる |
| エ | 市場経済における自由な競争 | エ | 新しい技術が共有される |
| オ | 統制経済による平等化 | オ | 自由な競争への信頼が生まれる |

問四 傍線部 A「協力」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 非自発的な協力あるいは強制的な協力は、法律に基づく制裁によってのみ、引き出すことができる。

イ 身近な存在に対する利他心や思いやりは、外の世界と関わることで広範な自発的協力につながる可能性がある。

ウ 政府や地方自治体と地域の自治会などが一体となって取り組むことで、人々の自発的な協力が得られやすくなる。

エ 公共性の実現のためには、刑罰や課税などの制裁を用いて自発的な協力を促すのが効果的である。

オ われわれの社会は利己主義的な人間が集まって生活しているため、利他主義的な協力による公共性の実現は不可能である。

問五 傍線部B「市場経済」の特徴について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを選びなさい。

- ア 個人や企業の利己的な動機に基づく行動が技術革新や社会的富の増大につながる。
- イ 市場経済が健全な姿で機能している限り、富裕層と貧民層の格差が生まれることはない。
- ウ 世界におけるグローバル・エコノミーの展開により、市場経済の性格が変容しつつある。
- エ 国が経済運営を主導する状況においても、市場経済がそれなりに健全に機能することは可能である。

オ 市場経済の秩序の安定化は、「勝ったり負けたり」の習慣化と自由な競争への信頼によって可能となる。

問六 傍線部C「秩序の形成」について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

- ア 議会、行政、司法がそれぞれ公権力を行使することにより、法秩序が形成される。
- イ 公（おおよけ）と私（わたくし）の二分法では、下からの秩序形成は危険なものであり、否定されるべきと考えられることがある。
- ウ 阪神淡路大震災をきっかけとしてNPO法が成立施行され、様々なボランティア活動が社会慣習として定着した。
- エ 市民社会の形成と自由な経済競争である市場経済の実践は、矛盾するものではない。
- オ 秩序を形成するためには、協力が継続的に行われ、社会の中で一定の役割を果たし続ける必要がある。

問七 次のア～オについて、本文の内容に合致するものにはa、合致しないものにはbを、それぞれマークしなさい。

ア 社会の基本ルールに従わない人に対しては、刑罰という制裁を加えなければ秩序は形成されない。

イ デビッド・ヒュームやアダム・スミスは、利己的な動機に基づく行動が結果的に平等の実現に結びつくことを「神のみえざる手 invisible hand」と表現した。

ウ 社会主義経済が崩壊したことにより、「競争すれば協力していることになる」という考え方のインパクトが弱まることとなった。

エ 公共性の実現のためには、権力による法秩序の形成だけでなく、「公」と「私」を媒介する「公共」というレベルでの秩序の形成が重要である。

オ 現在の政党の主たる関心は、法律の制定や国家予算の配分であり、その活動が市民社会の形成に結びついていないといえない。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

使い古され過ぎて逆にもはや誰もしていないのではないか、という導入から始めよう。『広辞苑』によれば、陰謀とは「ひそかにたくらむはかりごと」「〔法〕二人以上の者が犯罪行為を謀議すること」である。その意味での陰謀は、時と場所を選ばず、人類社会に普遍的なものだろう。

本稿でこれから述べる意味での陰謀論的信念も、はるか昔からあったかも知れない。マリウス・ラーブらは、人類が定住生活に移行し、内部と外部の境界が意識されだしたときに、初期の陰謀論が育まれたと述べている。出来事の背後に陰謀の因果関係を見出す思考は人間の普遍的な精神的メカニズムなのだろう。

しかし少なくとも、現在流通しているものに直接つながる陰謀論の起源^Iは、啓蒙主義とフランス革命の時代における近代化の過程と、それにたいする反発の産物だ、と概ね考えられている。

一九世紀から二〇世紀にかけて陰謀論は繁栄し、世界的な陰謀論の形をとるようになり、国際的に流通した。「陰謀論 (conspiracy theory)」が独立した概念として成立し、学問的関心の対象となったのは、さらに二〇世紀後半になってからである。

陰謀論という言葉をもっとも初期に使用したカール・ポPPERによれば、それは世俗化の望ましくない副産物のひとつである。我々の祖先が世界のあらゆる出来事を神の意図によるものと信じていたとすれば、陰謀論は世俗化によって失われたその神の場所——物事の意味と責任を負う主体を、^{*}シオンの賢者たち、独占主義者、資本家、帝国主義者で埋めたのである。この考えでは、社会で起こるあらゆることは、一部の強力な個人や集団による直接的な計画の結果である。ポPPERは、このような陰謀は「決して——あるいはほとんど」ありえない、と述べている。社会における行動は、常に意図せざる結果を伴う。それこそが、社会生活の最も顕著な点だからである。

現在の陰謀論研究の出発点となった政治学者リチャード・ホフスタッターは一九六四年に、陰謀論の考え方を「偏執症的様式 (the paranoid style)」と定義した。その特徴は、歴史のあちこちに陰謀を見出すことではなく、巨大な陰謀を歴史的な出来事の原動力と見なすことである。

二〇二〇年に、陰謀論研究の現時点での集大成ともいえる書籍『ラウトレッジ版 陰謀論ハンドブック』が出版されたが、その冒頭では歴史学者ジェフリー・キュービットと、政治学者マイケル・バーカンの定義が紹介されている。前者は「陰謀論とは、時事問題や歴史の大筋を理解するための方法であり、意図主義 (intentionalism)、二元論、オカルティズムを特徴としている。陰謀論は、すべてが計画されており、偶然に起こることはないとし、世界を悪の陰謀者とその陰謀の無実の犠牲者に厳密に分け、陰謀は秘密裏に行われ、目的を達成した後もその存在を明らかにしないと主張している」、後者は「偶然に起こることは何もない、見かけ通りのことは何もない、そしてすべてがつながっている」というものである。

これらの定義に、二点付け加える必要があると思われる。ひとつは、陰謀論による説明は、同じ出来事についての主流の説明を拒絶するということ。もうひとつは、この語が中立的な概念ではなく、X 主張に対して、否定的に用いられるということである。

陰謀論というラベルは、受け入れられている説明に反した、より妥当性の低い主張であることを意味している。そのラベルの機能は、そうした主張を欠陥品として嘲笑し、議論を打ち切ることである。したがって、このような排除を避けるため、「私は陰謀論者ではありませんが……」といった前置きが時に必要とされる。

難しいのは、陰謀は実際に存在しているということである。何某か^{なにがし}が秘密裏に行われてきた長い歴史を考えれば、特定の出来事が陰謀の結果ではないかと疑うこと自体は不合理ではない。陰謀論^{II}をア priori に非合理的なものとみなすのではなく、ケースバイケースで検証すべきだ、とする見解もある。またカルチュラル・スタディーズ研究者のジャック・Z・ブラティッチは、陰謀論が存在するとしても、それは陰謀論という言葉が生まれた瞬間から存在しているにすぎない、と述べる。

つまり、望ましい説明と望ましくない説明の境界線を引くための概念だ、ということだ。彼は、アメリカ同時多発テロ事件についてジョージ・W・ブッシュ政権がアルカイダとサダム・フセインの共謀を主張したものなど、このレッテルから逃れた陰謀論が数多くあることを指摘している。

しかし、陰謀論という語は、否定的に取り扱われるという点にこそ、その根幹があると思われる。陰謀の主張が正しかった、あるいは正しいと見なされたとき、陰謀論は消えるだろう。社会的に承認を受けた言説は陰謀論とは呼ばれない。陰謀論は、既存の知識や社会に対する疑いと不安が背景にある。したがって陰謀論の受容は、単純な事実誤認だけの問題ではない。あくまで社会的に認められない、受け入れられない言説であることが、陰謀論の存在意義なのだ、とも言える。同時にそれは、周縁的であるからこそ、アンチテーゼとしての魅力を持っているということでもある。

陰謀論は、世の中はこうあるべきだという認識と現実とのギャップを、自分で理解するのに都合のいいように埋める解釈枠組の一つである。ブラッドレイ・フランクスらは陰謀論を、既存の世界観を脅かすような出来事の意味を理解するための準宗教的装置と捉えている。

陰謀論が導き出されるためには、自己の認識と現状の乖離からくる「世界は間違っている」という判断と、自然にそうなるはずがない、という前提が必要である。現状についての一般的な説明に納得できるならば、隠された原因を追究する必要はない。従って陰謀論者が感じているのは大きな不条理であるはずである。歴史の意図せざる結果などではなく、何者かによってそのように、徹頭徹尾計画的に操作されてきたのでなければならぬ。世界の現状を直接的に引き起こした、明確で単純な因果関係が求められる。陰謀論はそのような、「世界のおかしさ」の犯人探しとして機能する。

ロバート・ブラザートンによれば「陰謀論はすべてが意図されたものであると仮定する」「陰謀

論は異常に悪意のある意図を前提としている」。

偶然など存在しないという信念は、共通して見られる特徴である。彼らは世界を、偶然や無意味なもの存在しない、極めて理性的で合理的なものとして考えているように思われる。同時に彼らは、人間の意志が事象を統制できる程度に關して過大評価しているようだ。つまり、何事が起こったならば、そこにはかならず何者かの計画が存在するのである。

断片的なものをつなげて意味あるものを読み取るパターン認識能力は、人間に生理的に備わっているものだが、これが過剰に働くと、見える必要がないものが見えてしまうことにもなる（壁のシミが幽霊に見えるなど）。歴史や社会を読み解くうえでも、点と点をつなぐ能力は不可欠だ。しかし生理的機能の場合と同様に、因果関係の過剰な検知は、やはり見えないものを見ることになる。様々なものを陰謀という見えない線で あ につなげてしまう陰謀論は、いわばそうした過剰なパターン認識の産物といってよいだろう。ジョゼフ・A・ヴィトリオルらは、二〇一六年大統領選挙に關連して集められた米国民の大規模サンプルを用いて、複雑な因果関係の現象を理解する能力を過大評価している人ほど、陰謀論的信念を持っている傾向があることを示した。また、カレン・ダグラスらは、スクリーン上を動き回る図形を「擬人化」してしまう、つまり存在しないところに主体性 (agency) を検知してしまう傾向と、陰謀論を支持する傾向の関係を調査する実験を行い、正の相関があることを示した。ただし、パターン認識の高さと陰謀論的信念との関連性は見出せなかったとする研究もある。

このような、世界に偶然の入り込む余地は無いという仮定と、世界があるべき方向から外れ続けているという認識から、世界は邪悪な意図によって操作されているという結論が導かれる。悪は常に自覚的で、外部から侵入してくる存在として想定されることで、自己の正しさと世界の本来的善性は保たれる。善と悪の境界は明確になり、理解の枠組は分かりやすく強固なものとなる。J・エリック・オリバーとトーマス・J・ウッドは、陰謀論は異常な社会的・政治的現象の原因を、目に見えない、意図的な、悪意のある力に求め、世界を善と悪の「マニ教的」闘争という観点から解釈する、と述べる。マイケル・バーカンによれば、陰謀論は「世界が任意的なものではなく、意味に満ちていると約束」し、Y 「幻想世界」を提供する。

世界は陰謀に支配されているという見方は、陰謀があらゆる出来事についてのデフォルトの説明となる、「単一論理の信念体系 (monological belief system)」に行き着く。陰謀論の世界観では、世界の全てが陰謀のフィルタを通して解釈される。逆に言えば、世界は陰謀の視点から解釈するだけで全てが明瞭に理解できる。

ある特定の陰謀論を信じる人は、互いに無関係なものであっても、他の陰謀論も信じる傾向にあることは多く指摘されている。ヴィーレン・スワミーらの研究では、研究者が創作した架空の陰謀論を信じる程度についても同様の傾向が確認された。マイケル・J・ウッドの研究では、互いに矛

盾する陰謀論でも支持率に正の相関があった。「ダイアナ妃は死を偽装した」と考える人ほど、「ダイアナ妃は殺害された」と考える人が多かったのである。また、米国特殊部隊の急襲時にはオサマ・ビン・ラディンはすでに死亡していたと考える人ほど、彼がまだ生きていると考える人が多かった。ただしこの結果は、政府の隠ぺい工作への確信に媒介されており、両方同時に信じているというよりも、どちらにせよ政府は事実を隠しているに違いない、という反応である。「その思考の基礎にあるのは、権力者は大衆を意図的に騙しているという視点である。陰謀論を信じるに当たっては、個々の陰謀説同士の整合性よりも、陰謀論者のいわば高次の世界観との首尾一貫性が問題なのである」。

陰謀論者たちの主張は多岐にわたるが、個々の構成要素は、その多くが共通している。言い換えれば共有される一連の部品があり、それらの取捨選択によって陰謀論が構築されている。各々の部品の意味や関係性は、それが位置づけられる陰謀論のストーリーごとに異なるが、部品の内容自体が大きく変化することは無い。それらの部品の多くは、陰謀論者同士で相互引用を繰り返されている。陰謀論の話題の多くは出処不明で真偽確認が困難であり、相互引用による反復が真実性を決める際の直接証拠として代用される。つまり、より多くの人々に流布し、より多くの人びとに主張されればされるほど、より一層「真実」としての信憑性を獲得するのである。こうした反復による自己確証は、生み出された背景や原典を離れて言説を再生産する。身分制秩序に対する共和主義者の陰謀を弾劾するフランス革命期の反フリーメーソン陰謀論は、封建的貴族主義者たるメーソンの反共和主義陰謀を主張する現代アメリカの陰謀論に、そのまま転用される。このようなあり方が可能なのは、重要なのは部品そのものでなく、それを位置づける陰謀論のストーリーのあり方だからなのだろう。どの程度明確なストーリーが用意されているかは論者次第である。全てのことには何らかの陰謀があるに違いないという確信があれば、陰謀論の世界観を構築するには十分だ。

世界の全ては相互に関係し統一された陰謀のタペストリーを織り成しているのだから、^{IV}あらゆるものから陰謀の「証拠」を読み取ることができる。自分は正解を既に知っているのだ。従って自説の傍証となる情報は無批判に受容される。たとえどれほど事実誤認が指摘されても、予め正しいことが決定している枠組は全体として正しいままである。同様に、何かを邪悪あるいは虚偽と断じるには正解に反しているという事実があれば十分であり、対象についての詳細な知識は必要とされない。

陰謀を証明する証拠は真実であり、陰謀を否定する証拠は虚偽である。ブリアン・L・キリーは陰謀論の特徴として、陰謀を反証する証拠が、逆に陰謀を証明する証拠として解釈される点を指摘する。「ある理論を支持する証拠が当局によって積み上げられれば積み上げられるほど、陰謀論者は「彼ら」がいかにひどい公式のストーリーを私たちに信じさせようとしているかを指摘するのである」。ブレダン・ナイアンらは信念に対する反駁がかえって信念を強化するという「裏目の効

果」(backfire effect)を実証している。ウッドらも陰謀論的信念は、否定的証拠が出てくるたびに、それを合理化するために陰謀の新たな層を追加していく「退行し続ける探求プログラム」(degenerating research program)の様相を呈する、と述べている。

あるいは、陰謀を証明する証拠がないこと、それ自体が陰謀の証拠とすらなる。陰謀があるのは確実なのにどれだけ探してもその証拠が無い、それはつまり、それだけ陰謀勢力が強大で周到であることを示しているのだ、という具合である。再びキリーによれば、自然科学とは異なり、陰謀論の場合は調査される側が積極的に妨害を企てるのだから、反証可能性が確保し難いのは当然のこととみなす。「もしニュートリノが単に検出されにくいだけでなく、積極的に検出を避けようとしているとしたらどうか」というわけだ。問題なのは、陰謀の証拠が得られない場合に、疑いがますます深化していくことにある。いつまでも証拠が見つからず、反証ばかり積み上がっていくと、陰謀の確信を維持するために、それらも陰謀の仕業として説明しなければならなくなる。こうした過程を経て、最初は少人数だった陰謀の企てが、だんだんと大きな陰謀となる。

陰謀論の論理には一種の **い** がある。その論理は内的に完結しており、外部から見れば荒唐無稽で矛盾に満ちていても、それ自体としては整合性を保つことが可能なのである。事実誤認の指摘や反証は必ずしも陰謀論を揺るがせない。むしろ、否定されてこそ陰謀論は成立する。「真実は隠されている」のだから、否定され、認められないのが当然なのである。

(辻隆太郎「陰謀論へのイントロダクション」一部改変)

* シオンの賢者たち……『シオンの賢者の議定書』という偽書に登場するユダヤ人指導者のこと。この本の中で、世界の政治を裏から操り、「ユダヤ王」のもとに世界を征服する計画が述べられている。

問一 空欄 **あ** ・ **い** に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | |
|---|-----|-----|---|--------------------|-----|
| あ | ア | 意識的 | い | ア | 無窮性 |
| イ | 応急的 | | イ | 不如意性 | |
| ウ | 作為的 | | ウ | 無謬性 ^{びゅう} | |
| エ | 技巧的 | | エ | 不可侵性 | |
| オ | 恣意的 | | オ | 無差別性 | |

問二 傍線部Ⅰ「陰謀論の起源」について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア 陰謀論的信念は内部と外部の区別があるところに発生し、この区別は人類が定住生活をするようになって生じたものである。

イ 現在の陰謀論につながる考え方は、フランス革命や啓蒙主義における近代化の過程に伴って現れたものである。

ウ 世俗化の過程において、かつて神が占めていた場所に、さまざまな陰謀論者が登場するようになった。

エ 陰謀という行為は、時間と場所を選ばず、人類社会に普遍的なもののだが、陰謀論の勢が増すようになったのは、一九世紀以降のことである。

オ 二〇世紀後半になるまで、陰謀論は、学問的関心の対象として一つの独立した問題領域とはなっていないかった。

問三 空欄

X

 に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 容易に理解しがたい

イ 自らの立場を強弁するような

ウ 新しい知見をもたらしている

エ 取るに足りないとみなされる

オ 十分主張を展開していない

問四 傍線部Ⅱ「陰謀論をアプリオリに非合理的なものとみなすのではなく、ケースバイケースで検証すべきだ、とする見解」に対する筆者の見解として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 陰謀という行為は実際に存在し、陰謀論の主張が正しいかどうかは決められないので、筆者はこの見解に賛成している。

イ 陰謀論という言葉によって、望ましい説明と望ましくない説明の境界線が引かれることになったので、筆者はこの見解に反対している。

ウ 陰謀論というレッテルを貼られることがなかった陰謀論が数多く存在しているので、筆者はこの見解に対して賛成している。

エ 陰謀論が社会的に承認された場合は、陰謀論としては消えてしまうので、筆者はこの見解に反対している。

オ 陰謀論の受容は単純に事実誤認だけの問題ではなく、既存の社会に対する疑いと不安が背景にあるので、この見解に反対している。

問五 空欄

Y

 に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 現実世界よりはるかに首尾一貫した

イ 現実世界よりはるかに多様性を備えた

ウ 現実世界よりはるかに望ましい

エ 現実世界と同様に混沌とした

オ 現実世界と同様に悪意に満ちた

問六 傍線部Ⅲ「世界の全てが陰謀のフィルタを通して解釈される」とあるが、その結果生じる個々の陰謀論はどのようなものになるか。次のア―オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア ある特定の陰謀論を信じる人は、互いに無関係な他の陰謀論に出会っても、信じる傾向にある。

イ 矛盾する陰謀論であつても、基礎にある陰謀の視点が共通していれば、どちらに対しても陰謀論者は支持することになる。

ウ 陰謀論の話題の多くは、真偽も出所も不明ではあるが、他の多くの陰謀論に使われることで証拠として扱われる。

エ 個々の陰謀論は、それらの間で整合性が保たれることで、より高次の陰謀論の世界観が構築されるようになる。

オ 個々の陰謀論の主張は多岐にわたるが、それを構成する要素の多くは共通しており、生み出された背景から切り離されて部品として機能する。

問七 傍線部Ⅳ「あらゆるものから陰謀の「証拠」を読み取ることができる」とあるが、このことについて述べた次のア―オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア 陰謀論に対する反証を積み上げても、陰謀論者にとっては、公式に認められているストーリーがいかにひどいかを示すに過ぎない。

イ 反証ばかり指摘され、陰謀の証拠が得られない場合でも、陰謀論者の言う陰謀の企てにはいささかの変化も生じない。

ウ 陰謀論に対して有利になるような情報であれば、その真偽を問わずに信じられるものとされてしまう。

エ 陰謀論を証明する証拠が見つからない場合は、陰謀勢力が証拠を見つけることを妨害しているからと説明される。

オ 事実誤認の指摘や反証の指摘があるからこそ、陰謀論は隠された真実として認められることになる。